

學校教育法における幼稚園 (四)

— 講習筆記 —

倉 橋 惣 三

前 號

五 學校教育における幼稚園の目標 (中)

(三) 幼稚園保育目標の二と三

(い) 幼稚園と社會性の教育

(ろ) 集團生活の經驗

(は) 社會事象に對する正しい理解と態度

六 學校教育法における幼稚園の目標 (下)

(四) 幼稚園保育目標の四と五

小學校の目標について

幼児教育の目的を意志とか感情とか大人の言葉で云うのは間違ひであるが、假りに大人の言葉で表現してみると、これ

までは、第一項健康、第二第三項感情・意志であつた。次の四と五は少し性質が違つて知的教育ではないがその問題の性質が知的なのである。

さて幼稚園の教育は幼児期で特殊の教育である。小學校の豫備ではない。がしかし、子供自身は幼稚園を出て、小學校へ行くのであるから、教育の内容としては一貫し連絡してい

る事を認めなければならぬ。そこで教育の心構えからは、この子は小學校へ行くと云う考えを始終持つていなければならぬ。小學校は、健康・感情・意志の事も幼稚園と同じく重んぜられてはいるが、ここで一おう小學校の目標を見ておく事が大切だと思う。まあざつと承知すればいいわけであるが、小學校では幼稚園で一番の事が七番になつていて

「七、健康、安全で幸福な生活のために必要な習慣を養い、心身の調和的發達を圖ること。」

とある。小學校では「心身の」という。調和したる身體諸機能に更に精神と調和して行くという點が強調されている。前にさか上るけれども、一番始めには

「一、學校内外の社會生活の經驗に基き、人間相互の關係について、正しい理解と協同自主及び自律の精神を養うこと。」とある。これらは小學校だからすゝんでゐるのであるが、社會的經驗態度の芽生えは、幼稚園に既に養われているのである。それが更にすゝめられているのである。但し更にそれが、二項目にあつてあるところの

「二、郷土及び國家の現状と傳統について、正しい理解に導き、進んで國際協調の精神を養うこと。」

とまで進んでいる。そこで、第四項以下であるが、
「四、日常生活に必要な國語を、正しく理解し、使用する能力を養うこと。」

「五、日常生活に必要な數量的關係を、正しく理解し、處理する能力を養うこと。」

「六、日常生活における自然現象を科學的に觀察し、處理する能力を養うこと。」

「七、(前出)」

これを見ると、能力技能を養うという事が小學校教育の目標となつてゐる。幼稚園に於ては、能力を養うという事は表に出ない。ましてや技術を養うとは云われない。けれどそこへつながり、能力の教育にはいる準備は幼稚園で行われていなければならぬ。健康・感情・意志のみではない。知的能力のもとになる所が養われなければならぬのである。これに目標の四項・五項が考えられてくる。これらを知識とまでいうのは少し言い過ぎで、まして技能とは言えないが、しかしそれにつながつてゐることである。他の言葉でいえば、廣い意味での文化的生活である。少くもその文化の極くもとの處は幼稚園教育でも大切である。これが目標の第四項と第五項とに出てゐるのである。以上のことを頭に入れてよむと、四と五の目標が何をねらつてゐるかがわかる。又必ずしも能力や技術でないと云う限界もわかつてくる。物識りとか巧者とかではないが、文化的生活にむかつて行くもつとを養うのである。從來の幼稚園ではこれが技能的にまでもつて行かれた。言語でさえも技能性をもつて行われた。ましてや音楽や繪畫は、その文化の技能性がとり入れられ、上手に歌うこと、上手に畫くことという事が強く出てゐた。今でも皆さんが、この文化的方面を扱うところなりがちである。但し幼児教育ではそういうものはいつて來ない。それは、入れては早すぎ

るといふのでなく、文化に結びつく生活の態度・力を先ず、養つて行くので、根本的な事が末梢的の事で損われるのを恐れるのである。「畫を描きたい」というのが畫という文化に對する態度である。うまくかくという事が目的ではない。うまくという事が考えられだすと、もつと深い處の繪畫と結びつき大きな教育が損われてくるのである。

○目標第四

(い) 言語の使い方 を正しく導き

さて次にその一つ「を」をいへば、まず「言語の使い方 を正しく」については、これも幼稚園の歴史では、或意味では昔から尊重されたのであつた。何故尊重されたかというのと、昔の教育は言語が主であつた。今日のように實物にふれて行く方法がなかつたからである。文字もすなわち言語であるが、昔は「よみ、かき、そろばん」の「よみ」を始めて興えられて、次々と高等教育にはいつたのであつた。内容をもつた物にはいる前に「よみかた」というのを初歩とした。こゝでいうのは、それとは意味が違ふ。

こゝでは使い方を正しく導くという。正しくというのは發音が正しいというだけではない。幼稚園でも發音を正すが、言語の使い方の正しいというのは、つまり人と交渉して人と話したい事である。言語というものは、話す事の道具としてよりも、先ず人に話したい心である。これが言語の使い方の

正しい事の第一の問題である。さて人と話したいといふのは、人と話したくなる理由がある。これには二つある。言語によつて人に傳えたくなる物がこちらになければならない。それからもう一つは、むこうの人に話しかけたくなる理由が、むこうになければならない。獨り言は話ではない。外國語をわれ／＼が一人で稽古する。これは話しでなく語學練習であらう。そして言語としてのテクニカルに屬する。そこで朝起きていゝ氣もちなら、それを人にいゝたいというのが話である。そして人にあつたら「グッドモーニング」とひとりでいてくれるのである。又それほど氣分的でないものでも、子供は自分の知つてゐるいろ／＼の動物の話をしたくなる。ところで子供は犬という言葉を知らないといふ「ワンワン」という。これは正しき言語ではないが、「犬」の話しをしたいのである。立派な話である。しかしこちらがいたい氣持や事を持つていても、言語にならぬ場合がある。「思いあまりていゝがたし」である。心の中が充分出ると、いうのはむづかしい事である。われ／＼は人へ語るのである。相手がなくて話ではできない。ひどくおしやべりの人がある。又精神病者が話してゐるのは、私に話してゐると思つたら間違ひである。これらはさかんにしやべるが、「誰に」でもないのである。子供は話したい時、愛情のある人に話し、その人を探すものである。これこそ眞の人間の言語である。おかしい例だが、手紙が書きたくなるのは、うまいまずいでなく、宛名の人に出す事である。何れにせよ幼児教育では、發音的文章でなく、

言語の人間生活に於ける本當の意味が教育される必要がある。

次に、人間には、人の話しを聞きたがる云うことがある。人には云いたがるタイプと、ききたがるタイプとがあるが、幼児の常として、聞きたいのである。幼児がお話をせびるといふのは、それである。我々はとかく、話の内容が要求であるとのみ考えたがるが、實は私の言語を聞きたいのである。三匹の小豚の話をしてくれという時、その三匹の小豚を道具として、私の言葉をききたがつているのだということ、見のがしてならない事實である。しかしそこには内容が伴うてくるから文化と結びつく。その意味で聞こうとするのは、文化受け入れの大きな活動のもとになる。「言語の使い方」を正しく」という意味は、こゝまで伸びる。

但し、こうした人間的や文化的のほかに、言語それ自體の正しさも、勿論必要である。子供は猿の事を話したくてたまらない時「キヤッキヤ」でも「オチャル」でもいいが、正しい言葉があるからは、それを使わせた方がいいにきまつている。相手が英人ならマンキーと正しくいつた方がいい。發音が正しくなければ、云おうとする意志はあり、口には出しているが、相手に通じないこともある。殊に心持を話そうとする時はデリケートである。しかしこれは、必ずしも發音の、テクニクをテクニカルのこととして過重しているのではない。それは語學教授である。幼稚園では語學をするのではなく。「言語の使い方」を正しく」との人間的文化の本質をもと

して、かかるが故に發音も正しくしなければならぬという教育である。フランスの幼稚園の舊い習慣では嚴しい言語があつた。われ／＼はそうした末梢的な技能的なテクニカルなことを、こゝですゝめていゝのではない。

まだ心配だから一言つけ加えよう。言語の「使い方」といふので、言語の練習・語學的に考えられると違ふのである。言語がなければ文化は進まない。われ／＼が文化的に進むのは、歴史的の多くの物を言葉によつて受取るうとしてゐるからである。間違ひなく話し、きこうとする事がなければ、いづも自己は發展しないのである。

(ろ) 童話、繪本に對する興味

それから童話、繪本にはいつて行こう。童話・繪本、これを極く淺く解釋すれば、特に目標としてあげておく必要はない。こゝでいう童話は、狭い意味の童話として特別なものでなく、お伽話昔話に限らず、いろ／＼の話しをいうが、童話に對する興味は、われ／＼の日常の話をすゝめて行く上、すでに出來てゐる學問文化に、子供が興味を持つ始めになる。童話という語られてゐる物を面白がつてきくのは、やがて學問を受入れる事につながる。殊に童話は分類するまでもなく人類文化のすべてを含んでゐる。或はもつと文化の各種類に分かれて行かない形に於て、すべての文化が語られてゐる。よき童話であれば、學問・政治・經濟・科學その他あらゆる文化が含まれてゐる。そのうちどれが主になつてゐるかで科

學童話・歴史童話などを分類もされるが、或はあまり分類的特色がたよつてゐるのはいい童話ではない。いい童話は、未は分れてそれ／＼の分科に大成して行くものが、まだ分れぬ形でまとまつてゐるのである。よい果物は、どの味かわからない。その中に甘味あり酸味あり香りあり色あり、といった具合である。それを分けて仕舞えば、甘い丈なら砂糖菓子、辛い丈なら鹽菓子となる。しかし渾然（混然・雜然ではない）と皆はいつてゐるところがいいのである。そこで幼児は、一つ／＼の文化を興えられる時期ではないが、それが、渾然とはいつてゐる話を樂しむのは、面白おかしい淺薄な興味にちやかされてゐるものではない。本當に樂しむのは、その中にあるカルチャーとしての全體の味なのである。幼児は童話をきいてゐるうち、その中の藝術、科學等を文化として強く感じる時、その一つ／＼は學問であらうが、それが渾然としてあるところに、文化の味がある。そしてそれ／＼分れたものよりも興味が深い。文化そのものを受取る意味に於て、言語が意義を持つたと同じ意味で、やがていろ／＼の文化に興味を持つてもらふ爲に、童話に對する興味を養うのである。

繪本というのは、最もよき幼兒に興えられるピクチャーブックがあれば理想である。文字で傳えようとすると、觀念的理屈的になりかねない。それを避ける意味で、畫は觀念的理屈を越えた大きな表現である。今幼兒の見る繪本は大した物でなくても、やがて大きな文化を受取つて行く所の根源とな

る。われ／＼がこれらを目標とすると否にかかわらず、よき童話・繪本であれば幼兒は興味を持つのである。但し幼兒生活の全體としてはあまりに童話・繪本にかたよるのがいいというのではない。むしろ晴れた空の下に土にまみれて遊び、殊に子供同志の間で、社會生活を樂しんでくれる事をわれわれは望む。しかし又、それにのみ偏して、童話・繪本の興味に缺ければ文化に對するはじめをやつてゐるという事が缺けることになる。

○目標第五

（は） 創作的表現の興味

次は第四項であるが、前より更に一步進んで、第一に従來の幼稚園で、音樂・遊戲・繪畫によつて技能を養ふとしたのを一おう訂正して行かなければならない。言語という日常の生きた事でもテクニカルになりがちである。朝子供が「おはようございます」とたび込んで來た時、「そのいゝ方が悪いから、もう一度いつてごらんさい」と云つたとすると、これは教育ではあろうが、生きてゐる言葉を殺すようなものである。音樂・遊戲（これには手技・手工もはいる。）及び繪畫はテクニクなしには出來ない。幼兒教育に於ても、これらはテクニカルに扱いやすいが、こゝの目標としてはそうでないことを意味する。古い幼稚園では「……かた」ということを重要視した。近頃までも小學校で「よみかた」「かきか

た」等がいわれていたが、フレーベルの始めた幼稚園では、「……かた」が多くあつた。所謂恩物の使い方にも、ならべかた、とおしかた、えがきかたなどということが列べられた。

「かた」であるから技能となる。せつかく幼児が描きたくしようがない時、「かた」にふれるのは残酷である。幼児はその時、もつと繪畫の深いところにふれている。「かた」で導かれるのは、折角自らえがこうとしてゐる子供に無理解である。言語で「もう一度いいなおしてごらんさい」というのと同じである。言語にはこれが少いけれども、音楽・遊戲・繪畫等ではとかくこうした技巧的教育が多くなりがちである。われ／＼は「かた」は小學校でなさるべきものであると、いう事を知つて、程度は下けてゐるであらうが、小學校の技能教育から一步も出ていない。こうした點は、これからの幼稚園で大いに刷新されるべきである。前の幼稚園令の保育項目は此の誤りのもとになることが多かつた。こゝでいう、音楽・遊戲・唱歌は、もう保育項目ではないのである。さて又、「方法により」とあるけれども、人類の音楽は方法ではない。詩人作曲家が苦心、苦勞しなければ歌一つ出来ぬのである。その藝術を幼稚園へもつてくるので、方法的利用に止まるものではない。だからこそ「創作的表現」に對する興味を養い得るのである。

文化は童話・繪本により、又世にある學問の書物によつて謙遜に受け入れていかなければならない。しかし又同時に、既成品を受けつづばかりでなく、つくり出して行かなければ

ならない。幼児を、文化を新たにづくり出す者としてみるところに新教育の意義がある。人間は皆文化を創り出す者である。われ／＼は今までの文化を受けて惠典を受けている。しかしそれ丈であつてならない。創るところに價值があるのである。

音楽をならつていけば、その上手な歌うたいの藝人にはなるが、本當の音楽を味わうという事なしには、創作する事は出来ない。將來その子供たちの中から大音樂家が出た場合、上手に歌つたのが積つてそうなつたのではなく、その先生が高等な音楽を聞かせてくれたからであり、調子つばずれなりとも歌わんとする心を汲んでくれたからである。大音樂家は幼い時からうまかつたという。しかしいかに多くの子供が歌おうとする本當の心を、テクニクで押さえられてしまつてしまふことであらう。バッハにはその技術以上の天才があつた、バッハにはそれでよかつた。創作的表現の天才のないのに、いかに多くの幼児がテクニクを強要されることか。テクニカルだけで、この大きな文化を扱わされたとしたら惜しい事である。新らしい幼稚園は、活動と經驗はまずおいて、活動は、創作的表現興味の動いて來た時出て來るものである。その活動が貴いのである。出来上りの成績ばかり主にする、活動や經驗が主にされない。活動の貴さを主にすれば、出来上つた成績は問題でない。皆さんは幼児の繪をみた時、それを描いている子供の活動を目に浮べる事の出来る経験者である。その活動を離れて、出来ばえだけをみるのは幼児畫

の本當の見方ではない。描いている所をみているのが一番いい。出来上りをみると、むしろ技巧のよしあしがいいくなるのである。今までの教育ではとかく、結果の方を重んじた。子供の作つた粘土に例をとつてみよう。これがどう出来ているかというのではなく、どうしようかという幼児の活動が目に見えてくる。うまく上手につくるというのではない。ただこれ創作し表現したいのである。この活動が「創作表現に對する興味」なのである。だから幼児が繪をかいてみせた時「うまいなあ」というのは考えものである。歌にしても先生の節にあわせてうたうだけではない。遊戲にしても先生の振りにならつて踊るだけではない。先生が振りを見せて呉れないでも、レコードを聞いただけで子供はおどりだす。そこへステップがどうのこうのいつては、折角の表現興味に水をさしてしまうようなものである。繪は後に残り、おどりはその時／＼で消えてしまふが、創作表現の活動においては一つである。私は幼稚園の遊戲に對して、歌があつて、譜があつて、ふりつけがあつて、それを幼児にあてがうといういき方をどうかとも思う。第一節 こうして、第二節 こうして、というそれが全く悪いのではない。たゞその型を教えるのに窮々として、その音楽から、幼児がやりたくなる表現の出鼻を押さえてしまつてはならない。そう習い覺えた遊戲でも、ただやれば運動にはなる。情操教育位は出来るであらうが、それをもう一つ、創作表現という文化の根本に持つて行くのではないか。おどりの師匠がおどりを教えるというのでな

く、創作表現の興味を養う大きな文化教育でありたいのである。

繪についても幼稚園では手本を與えない方がいゝ。子供が表現しようとして、どうしても出せない時、ちよつとそばから助けてやる。これは親切なる導き方である。しかし、子供が描きたくもないのに、「猿はこうかけよ」というのはおかしいことである。ましてや「猿の描き方の簡單なるものはこゝうである」などと略畫を示すのは全くおかしい話である。子供はその型を覺えて、そう描きさえすればよいという事になつてしまふ。心の猿は死んで仕舞う。又實物を與えて之を描かせる場合は、これはよほど手本より生きてゐるから、子供は工夫して描きたがるが、それにしてもこれを寫生しなさいと示すのでなく、描きたくなつたものを描かせるようにしたい。その時、描きえないで困つていればお手傳いをしてやつていいが、描きたくなつたものを描くというところに創作表現があるのである。「柿というものはどうかくの」というのから出發したのと、「かきたくなつて」から出發したのとは天と地ほどの違いがある。

~~~~~  
以上で幼稚園の目的と幼稚園保育の目標とが終つたわけである。一々については甚だ簡單な説明に過ぎなかつたが、全體として、新しい幼稚園の性格を、その教育的ねらいの方から、よく把握していただきたい。

學校教育法第七章には、幼稚園に關し、以上の目的と目標とのほかに、左の事項が規定してある。

**第七十九條** 幼稚園の保育内容に關する事項は、前二條の規定に従い、監督廳が、これを定める。

すなわち、學校教育法においては、幼稚園の目的と目標とを示すことによつて、幼稚園の保育の特質とその大體の教育限度が規定せられてゐる譯で、それを實現してゆくための、實際としての保育内容は、全國必ずしも一律でなく、地方の實狀に即して定められるのである。この點は、小學校、中學校、高等學校の教科に就ても同様であつて、教育の劃一の弊を避けるために、新しい學校教育法の特執つてゐる方針である。こゝに監督廳と執つてゐるのは、幼稚園を所管している都道府縣監督廳のことであるが、將來としては、新制の地方教育委員會によつて代られるものであり、教育民主化の上にも、大きな意義をもつものである。保育内容といふのは、舊幼稚園令でいえば、保育項目がそれに當つてゐるが、新しい幼稚園では、保育項目といふものは規定せられてゐない。勿論、あの保育項目にあつた唱歌にせよ、談話にせよ、觀察その他にせよ、保育の内容に相違ないから、それらのことが幼稚園から除かれ得

る譯でないことは、いうまでもない。たゞ、あゝして五つを擧げて、特に示さないところ、保育内容としての自在の取り上げ方と、保育方法としての、活きた適用が出来る譯である。又保育内容は、これのみに限られるものでないから、幼稚園生活の幅も廣くなり、殊に、五つの保育項目だけにしてゐればいゝし、それが幼稚園保育だ、というような狭い、固定的な考え方は一掃されるのである。**第八十條**は、園児の年齢のことで、満三才から小學校就學の始期に達するまでといふことは、從前通りである。**第八十一條**は、幼稚園の職員に關すること、之れも從前と格別の變りはないが、保母といふ名稱は廢されて、教諭となつた。幼稚園の保育を掌るものを、教諭といふのは、文字の上からはびつたりしないようであるが、保母といふ、教育者か何かはつきりしない名稱にも、もの足りないところがあつた。殊に、この教諭といふ言葉は、大學の教授以外の、小中高等學校に一本に共通されてゐるのであつて、その點で、幼稚園保育者も、學校教育法による教育者であるということが、しつかり明かにされてゐる譯である。教諭になつたからといつて、幼兒を諭してばかりゐる人もあるまい。たゞ教育者たることを忘れてはならない。幼稚園の職員たるものの、眞の意義は、教育者たることにあるのであらうから、教育者が保育してゐるのであるから。

## 全國保育大會

— 會議と講習會 —

- 一、期日 會議(協議會)十一月二日(日) 講習會十一月四日(火) 五日(水) 午前九時より
  - 一、會場 會議 大塚窪町東京女子高等師範學校講堂
  - 一、資格 官公私立幼稚園、託兒所(保育園)保育従事者(園長保母主事經營者等)
  - 一、會費 金五十圓(會議講習會共四日間)申込と同時に納入のこと(片方のみ出席自由なるも、會費には關係せず)
  - 一、程日 第一日(午前)總會(午後)部會 第二日(午前)部會(午後)部會及總會 第三日講習會午前九時より午後四時まで 第四日講習會午前九時より午後四時まで
  - 一、申込 十月二十五日までに港區芝公園二號地、東京都保育連合會宛會費五十圓同封申込のこと
- 主催 東京都保育連合會・東京都  
後援 文部省・厚生省  
贊助 日本幼稚園協會其他各保育團體・保育關係諸團體